

文化・芸術

「花」

1916年、油彩、カンバス
23・2センチ×15・8センチ

中村 彝 (1887～1924年)

中村彝は茨城県水戸市に生まれ、幼いときに両親を、日露戦争では長兄を失いました。17歳のとき肺結核で軍人の道を断念し、療養の傍ら洋画家を志します。1911年に新宿中村屋の相馬夫妻の厚意で中村屋裏のアトリエに転居しますが、絵のモデルとなった長女・俊子との恋愛を反対されたことから距離を置き、16年には下落台にアトリエを新築。友人鶴田吾郎と競作した「エロシエンコ氏の像」をはじめ、悪化する結核と闘いながら制作を続けます。咯血(かっけつ)のため37歳の若さで亡くなるまで、わずか20年の彼の制作活動は同時に長い闘病とともにありましたが、芸術に情熱を注ぎ続け、西洋の美術の研究から生命感と深い内省をにじませる独自の画面を生み出しました。

大川美術館企画展「大川栄二生誕
100年記念 コレクターの目」から

本作は小品ですが、アトリエを移るころの作品。初代館長・大川栄二はこの深い赤い花に「教養深い荘重さの内に宗教観すら秘める赤」と語り、詩情と魂のあらわれを評しました。その絶筆もまた花を描いた静物画でした。

(大谷)

《名画の扉》

